

遺跡の復元と地域社会

RESTORATION OF SITES AND RELATIONS WITH LOCAL COMMUNITIES

若狭 徹 (明治大学)
WAKASA TORU (MEIJI UNIVERSITY)

遺跡の積極的復元 / ACTIVE RESTORATION OF SITES
未知の存在の可視化 / VISUALIZATION OF UNKNOWN EXISTENCE
地域協働 / REGIONAL COLLABORATION

1. はじめに

1989年（平成元年）にスタートした文化庁の国庫補助事業「史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場事業）」においては、歴史的建造物の積極的復元が事業要件として盛り込まれた。それ以前の史跡整備はいわば消極的整備であり、標柱と解説板程度しか存在せず、夏草に埋もれた各地の史跡は、一般市民の来訪を阻むかのようでしたらあった。その大きな枠組みの転換期に、当時群馬県群馬町教育委員会で史跡整備を担当していた私は、当事者として立ち会うことができた。

それまで小規模補助金で行われてきた史跡整備は、この時から復元建造物・大型屋外模型・ガイダンス施設建設という顕著なハードの整備が認められた。同時に、3年度継続で毎年1億円（このうち50パーセントが文化庁補助、残りは地元市町村と、都道府県が付け足し）というまとまった予算投入が可能となった。バブル期という背景も得て、日本の史跡整備を急速に進めることとなったのである。

同事業の開始から30年、歴史的建造物の大規模復元の事例が積み重なり、国民の文化財理解に大きく寄与したことは間違いない。私の大学のゼミにも、「親と史跡公園で遊んだことが考古学専攻進学の契機になった」とする学生が多い。復元というハード整備は進展した。しかし、文化財活用の主人公であるべき地域住民・地域社会と史跡の関わりはどのように形成されているのだろうか。本稿では、この点について成果と問題点を小考したい。

2. 群馬県保渡田古墳群の整備活用例

(1) 整備の経緯と経過

筆者は、かつて群馬県群馬町（平成合併後は高崎市）の文化財専門職員として史跡保渡田古墳群（5世紀後半の3基の大型前方後円墳）の保存整備を担当した（図1）。1986年より公有地化を進め、1993年度から「ふるさと歴史の広場事業」の採択を受けて整備に着手。他にも多様な補助金や起債を組み合わせ、2008年度に約13haの整備を完了した。

古墳群の中の八幡塚古墳については二重周濠の墓域全域を対象として整備し、石棺展示施設を内蔵させ、葺石を貼り、復元埴輪を並べて築造時の姿に完全復元した。本古墳は、人物埴輪研究の基準資料であるため、54体の人物・動物埴輪群像の復元、6000本の円筒埴輪の完全な配置を行った。もう一つの二子山古墳は、良好な現状を生かして修景整備し、八幡塚古墳との対比によって1500年の時間経過を可視化するものとした。園内には考古博物館（かみつけの里博物館）を建設し、学習拠点とともに、榛名火山の噴火で埋没した当地域の5世紀社会を総合的に解説した。

(2) 市民活動の実際

円筒埴輪の復元にあたり、住民参加による製作を採用した。埴輪工房と穴窯を設置し、スタッフの指導で市民が原寸大の円筒埴輪を6000本製作し、名前を刻んで古墳に配置した。整備に市民が参画するスタイルの構築である（プロジェクト6000）。

二子山古墳では周濠部の除草対策を兼ねて、地元住



図1 保渡田古墳群の整備と活用

民の発案で花の栽培が始まった。毎年、地元自治会が主導して百人規模の地域住民がボランティア参加で除草・播種・雑草除去・花の管理を行う（埴輪の里コスモスの会：中心メンバー36人+地元住民）。2万m²の周濠にコスモスが咲き、開花期に数万人が訪れる地域有数の催事となった。同古墳の内堤と外堤はバリアフリーであり、一帯の老人介護施設がバスを連ねて来訪する。

博物館では子供向けのワークショップを頻繁に実施し、ボランティアが補助する（かみつけの里ボランティア会：31人）。

周辺遺跡の調査成果を基礎として学芸員が古代儀礼のシナリオを書き、公募の市民団体が古墳において演技し、毎年秋の一大イベントとなっている（王の儀式再現の会：33人+地元小学生）。

これらの団体が実行委員会を作り、毎年大規模な秋祭りを実施している（はにわ祭り実行委員会。行政から補助金）。このほか、自主講演会を企画する博物館友の会（103人）が存在する（以上、人数は2021年度現在。以下に示す人数も原則として同じ）。

このように複数の市民団体が関わって、史跡の多角的利用が成されている。王の儀式再現の会が行う古墳での演技は、前方後円墳の象徴的な機能を、児童でも瞬時に理解できるイベントとして人気であるとともに、地元小学生が参加する事業として定着している。

（3）市民参加の波及効果

復元整備された古墳の莊厳さは、雑誌・書籍やテレビに紹介され、博物館入館者は2019年度に54,000人となった。公園利用者全体はカウントしていないが、地域住民の日々利用を含めれば10倍以上と思われる。近隣住民の散策などの定時利用で緩やかな監視機能が生まれ、復元埴輪の故意の破損事件は20年間にほぼ発生していない。また、隣地にJA物産館が開設されて都市住民に人気であり、地元農家への経済還元もなされている。

復元建造物の象徴性とそれを利用した市民活動によって、史跡の地域資産としての認知が広まり、「何もない町」から「古墳の町・埴輪の町」との誇りが醸成され、地域づくりの拠点と認識されるようになった。古墳は、かつて古代共同体の象徴であったが、復元整

備によって現代の地域シンボルとして再生したのである。

その後、同時期の豪族居館跡である北谷遺跡が発見されたが、速やかに保存決定が成されている（2005年史跡指定。現在までに公有化が完了）。上記の認識の高まりが保存を後押ししたことは間違いない。

関東地方のある高名な古墳研究者は自著のなかで、八幡塚古墳のような復元整備は行政の傲慢であり、「墳形の捏造」・「整備破壊」・「関係者は原罪意識に欠ける」と批判した。しかし、本古墳が草むした丘のままであったら、地域資産を評価する以上のような認識は惹起せられず、関連遺跡の保存は達成できなかつたであろう¹⁾。

3. 復元整備の二者

国内において、歴史的建造物の復元は相当数に及んでいるが、市民にもたらす効果には大別2パターンがあると考える。一つは「既視感の再生」、一つは「未知の存在の可視化」である。

（1）既視感の再生

主に近世・近代建造物の復元に対する効果である。例えば、A市に存在する史跡B城の建造物復元は、それを見る市民にとっては初見のものである。しかし、他の土地に存在する現存城郭建造物、あるいはA市に伝存するB城の絵図や古写真等によって形態への認知が獲得されている。それが復元整備によって現実化することで、史跡と市民との間に強い接点が速やかに形成されるのである。

史跡赤穂城（兵庫県）では1982年から2002年の間に主要建築物の復元が大規模に進んだ。この地では、城址顕彰の機運が市民に早くから存在し、また「赤穂義士」が市民の誇りになっている。ゆえに、赤穂城の復元成果は速やかに受容され、史跡と市民の一体感が醸成された。赤穂義士会、案内ボランティア、清掃ボランティアなどの史跡にかかわる団体が形成され、赤穂義士祭は48,000人（2016年）を集めるなど、生きた地域シンボルとして市民の誇りとなっている。

（2）未知の存在の可視化

古代遺跡など、人々の記憶に定着していない未知の存在の復元整備である。縄文時代の大型建物、弥生時代の環濠集落、石貼りの前方後円墳などがそれにあたる。

考古学のプロを除けば、市民にはこれらの本来の姿をイメージすることは難しい。また、復元にあたって学術的な真正性が問われる事案もある。しかしその復元は、想像もしていなかった圧倒的な歴史的存在への感動を強く呼び覚ます。「縄文人がこれほどの建造物を造ったのか」、「前方後円墳はこのように莊厳であったのか」というシンプルな衝動の喚起である。

上述の城郭建造物の復元は、「城下町氣質」のような地縁に由来する意識と結びつくが、未知の存在の復元による目覚めは、地縁を越えた、さらに広範な市民紐帶の形成を促す可能性がある。保渡田古墳群の事例や後述する御所野遺跡などをめぐる市民活動がその事例となる。

この場合のもう一つ重要な要素は、当該遺跡の発掘から保存までのプロセスである。昨日まで畠だった場所から多数の建物跡が見つかり、折り重なるように遺物が現れた。その市民の興奮が保存への原動力となつた。作家司馬遼太郎は青森県三内丸山遺跡の現地説明会に8千人の市民が集まつたことに際し、「遠きものを自分に組み入れる自己の確立のよろこび」、「ただのアナボコをみてさまざまに想像を構築できる教養をひとびとは戦後50年のあいだに身につけた」と評した²⁾。

しかし、市民を感動させた遺構は長く露出しておけない。その代替えとして「未知の存在であった建造物」が現地に復元される。このことによって感動は継続され、以後の市民活動の象徴が構築されることになるのである。

4. 地域連携の実態

（1）地域連携の模索

そのような市民の意識は、意識的に継続させる必要がある。私たちのバイブルといえる『史跡等整備のてびき』の「事例編」³⁾には、69例の整備事例が所収されている。重要なアーカイブとして後進たちの参考

になるものである。ただし、その記載の多くは整備経過や技術的側面に割かれ、市民協働に関する記載例は29件にとどまる。それを見ると、市民活動は解説ボランティアが大半であり、複数の市民団体が活動しているという事例は希である。「市民との関係形成が急務」との問題意識が多くの事例に付記されるが、逆にいえば市民との協働が思うほど進んでいない現状が見いだせる。『てびき』発行から15年を経た現在でもこの点を分析したレポートに接しないので、今回、大規模復元の代表といえる下記事例の現状を調べた。

(2) 特別史跡三内丸山遺跡

青森県青森市に所在する縄文時代の集落遺跡である(公園面積39ha)。1992年に発見、94年には県立運動施設の建設を中止して保存された。短期整備の後、2002年に開園。2021年には世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産として登録された。

巨大な掘立柱建物、大型竪穴建物など多数の建物が復元され、日本の縄文遺跡の代名詞のような存在である。青森県教育委員会が現地に三内丸山遺跡センターを設置し、専任職員15、臨時等10名が配置される。発掘調査・整備・研究を継続しつつ、盛んに活用事業を展開し、毎年「年報」が刊行されている。2019年度は約29万人が来園した。

住民との関わりをみると、保存活動段階から複数の市民団体【①縄文映画を作る会、②NPO法人三内丸山縄文発信の会、③三内丸山応援隊】が活動していたが、現在は、①は終了、②は規模を縮小し、③が一般社団法人となって史跡公園の運営をサポートしている⁴⁾。

また、ボランティア約100人が登録し、案内ガイド(一日8回)・体験学習・ミュージアムショップの運営などにあたる。

本遺跡では、発掘の感動を契機として生まれた市民団体を運営に取り込み、活用並びに運営の柱としてきた。また、復元建物の修復にあたって地元市民・児童の参加を組み込むなどの実践⁵⁾が継続される(図2)。世界遺産登録の運動も「縄文遺跡は地域の誇り」との市民意識の形成が4道県の知事会を動かし、新しい世界的価値の創出に結実したと言える。

(3) 特別史跡吉野ヶ里(国営公園)

佐賀県吉野ヶ里町に存在する環濠集落跡で、日本の弥生時代遺跡の代表的存在である。1986年に発掘開始、89年に工業団地の建設を中止して保存された。整備検討の過程で国営公園(吉野ヶ里歴史公園)とすることが決定され(92年)、仮整備の後、2001年に開園(117ha [国54ha・県63ha])し、現在に至る。

環濠集落内の高樓や祭殿、竪穴建物群、倉庫群、墳丘墓、甕棺墓群などがトータルで大規模復元される。国土交通省九州地方整備局海の中道海浜公園事務所の歴史公園課が所管し、吉野ヶ里歴史公園センターが設置されている。同センターは正職員9名の他、契約職員・アルバイト含め60人以上のスタッフで運営され、多彩なイベント、ワークショップ、展示が開催される。利用者の満足度は高い。

2020年度の利用者は72万人。ボランティア27名が登録され、解説ガイド実績は年間28000人に上る。地元との関係では、団体の催事に公園利用を許可したり、



未知の存在の可視化(復元された巨大建物群)



住民と協働した建物復元(註5文献より)



図2 三内丸山遺跡の整備と活用

児童への出前体験が行われる。

本遺跡の保存運動初期から仮整備の段階においては、マスコミ報道の影響で見学者が全国から殺到した。これに対応するため、①吉野ヶ里遺跡協力会、②吉野ヶ里パーキング、③吉野ヶ里遺跡公園助成会などの地元市民団体が発足した。当時、佐賀県教育委員会で本遺跡の保存担当係長となった納富敏雄は、遺跡清掃・交通整理・展示室運営・売店・解説ガイド・無料湯茶接待に活動する①は、遺跡活用にとって特に大きな力であると評価している⁶⁾。しかし、上記の団体は現在すべて解体しており、国が公園管理主体となったことで地元との関係は弱まったと指摘する向きもある（西日本新聞2020年5月22日記事）。地元の佐賀県による市民協働の施策も目立ったものはない。

本遺跡公園は、国民への文化財理解の促進、復元の規模、ソフト事業の展開、観光面での波及効果など、いずれも面でも国内屈指の成功例に他ならない。ただ、住民との関係形成に限っては、国営公園ならではのジレンマを抱えるようである。

(4) 史跡御所野遺跡

岩手県一戸町（人口11200人）に所在する縄文時代集落（公園面積13ha）である。1989年に工業団地造成に伴って発掘され、町を二分した議論を経て保存を決定、93年に史跡指定された。2002年に御所野縄文公園としてオープン。2021年に世界遺産の構成資産として登録された。

現在、配石遺構・盛土遺構・竪穴建物・掘立柱建物が復元され、土屋根構造の竪穴建物が初めて復元され

たことでも知られる。博物館と体験施設が併設され、多くの体験プログラムが用意されている。

複数の市民団体が存在することが特徴的であり、①御所野遺跡を支える会（28名）は解説・案内・清掃・イベント運営に協力する。②御所野発掘友の会（33名）は発掘参加者を母体とし、公園清掃・イベント協力を行う。③自然と歴史の会（28名）は町内の文化財調査・歴史学習、自然愛護、文化活動とともに御所野遺跡の運営に協力する。④御所野愛護少年団（59名）は町立小学校の児童を構成し、遺跡の学習と愛護活動にあたる。年2回の清掃活動（クリーンデー）には、上記の他に複数の地域団体が参加し、1回におよそ200人が協力している（図3）。

開園後の活動で特筆されるものに公園外縁部を活用した「縄文の里山づくり」がある。森林から得られた資源を用いて多様な実験考古学的取り組みを行うとともに、公園のツールを製作し、循環させる⁷⁾（御所野縄文博物館 2021）。同遺跡の史跡整備総括報告書には、20年間の各団体のすべて活動や会員数、実施したソフト事業の記録が記載され、その厚みは圧巻である⁸⁾。

現在は、①を母体に設立された「いちのへ文化・芸術NPO」（職員10名）が公園の運営を受託する。

市民協働の実践は、担当職員のマンパワーに負う部分大きく、その継承が課題になる。御所野遺跡ではその点を意識した人づくりが行われている。



図3 御所野遺跡の整備と活用

住民と協働した多彩な活動、復元建物のリノベーション（註7・8文献より）

5. 小 結

以上述べてきたように、ふるさと歴史の広場事業のスタートから30年前を経て、各地で史跡の復元事業が大きく進展した。文化財関係者のなかには、歴史的建造物の復元を批判する向きもあるが、史跡公園とガイダンス施設が多く生まれたことで、地域社会と文化財の接点は増え、市民の歴史理解を育んだのは紛れもない事実である。いま、書店に多彩な考古学系のムック本が並ぶのは、隔世の感がある。先述したように、大学の史学科への進学理由として、「小学生時代に親と史跡公園を訪れ、ハンズオンに参加し、関心を持った」という理由が最も多くみられる。効果は確実にあったのである。

大規模復元が市民に与える効用には2つのパターンが考えられたが、なかでも「未知の存在を可視化」する原始古代の遺跡復元は、市民に強いインパクトを与え、古いものを新しい地域シンボルとして再生・創造する効果を生んだ。縄文遺跡群を世界的価値にまで高めた営みはその最たるものである。遺跡を核として、新しいコミュニティー形成にも寄与することも可能だ。

ただし、それには肥しをまき、水をやることが必要である。国営の場合は、県・市町村との関係を保持・発展することが求められ、県営の場合は地元市町村との連携に気を配る必要がある。遺跡保存への熱気の中で生まれた地域の人たちの「私たちの遺跡」との思いを引き継ぐことが望ましい。

市町村営の場合は、史跡公園を維持する財政負担が一層厳しい。それを助けるのが住民団体である。保存時の動きを記憶する第一世代と、その思いを継承する第2世代以降を繋ぐのが史跡での協働事業といえる。その営みは、解説ガイドや環境整備を含めて多岐にわたるが、公園の象徴たる復元建物・建造物のリノベーションへの市民参加は大きな効果がある。特に、実験考古学による高度な検証を加えながら修理・再生並びに価値の付加を行い共有することが重要である。これは、竪穴建物や埴輪配列の再生などおいて実践されているところである。

歴史的建造物の積極復元のスタートから30年、史跡

整備を行うハードのノウハウとともに、形成された資産を市民とともに高めていく方法論や制度がより必要な段階を迎えたといえよう。

本稿執筆にあたり、吉野ヶ里遺跡公園管理センター福田敬、佐賀県教育庁文化課渋谷格・土井翔平、御所野縄文博物館高田和徳、三内丸山遺跡センター茅野嘉雄・山地雄大の各氏に多大なご教示を得た。ここに御礼申し上げる。

【註】

- 1) 若狭徹 2004 「史跡整備の効用と文化財保護意識の醸成—保渡田古墳群の整備と活用を通じて」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会
- 2) 岡田康博・NHK三内丸山プロジェクト 2005 『縄文文化を掘る』NHKライブラリー
- 3) 文化庁記念物課 2005 『史跡等整備の手引き』
- 4) 三内丸山応援隊 2005 『三内丸山応援隊の10年—SPIRIT—遺跡ボランティアとして』
- 5) 青森県教育委員会 2014 『縄文の家づくり体験の記録』
- 6) 納富敏雄 1997 『吉野ヶ里遺跡—保存と活用への道』吉川弘文館
- 7) 御所野縄文博物館 2021 『縄文里山づくり—御所野遺跡の縄文体験』新泉社
- 8) 一戸町教育委員会 2008 『御所野遺跡環境整備事業報告書III—総括報告書—』